

クラシック巡礼 3

ショパンの嬰ハ短調

サイト掲載: www.i-s-m-kk.co.jp/

2018年 7月21日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

プロローグ

クラシック巡礼「珠玉のノクターン」

2009. 12. 28 2018. 05. 17改 別当 勉

むかし、「戦場のピアニスト：2002」という映画が封切られた。当時は、九州の福岡に居て、ロードショーを観た呑み友から、その映画の音楽について問われたことがあった。答えられなきクラシック・フリークの信義に悖る（そむく）と素人のむこうみずというか、身構えたのだから身の程知らずである。「主人公のポーランドのピアニストって有名な人だよな？」

はて、ポーランド出身の名ピアニストとは、ホテル支配人みたいなアルトゥール・ルービンシュタインか、映画を観てないから断言はできない。一応、用心して、見てから答えると言ったら、友は不服顔だった。かろうじて、ショパンの曲が演奏されたはずだ、と応えただけ。

さて、ようやくレンタル・ビデオで見ることができたのだが、ショックで震えた。いきなり、20番のノクターン（夜想曲）だった。ショパンのノクターンは、クラシック鑑賞の入門曲であるから、僕は見下げていた。ノクターンといえば第2番・変ホ長調（作品9の2）である。あの米映画「愛情物語：1955」のメインテーマで有名になったことで、代表的にみなされるが、21曲もある氷山の一角であり、ピアノの詩人に申し訳ない。失礼である。

さすがに、この

ノクターン第20番 嬰ハ短調（遺作；20歳）

には痺れる。どうしてなのか。それは、かの名ヴァイオリニストのナタン・ミルシテインがヴァイオリン曲に編曲して演奏したからだ。でも、録音は少なく、かろうじてジョン・キョンファ（鄭京和）のオムニバス・アルバムがあるぐらい。クライスラーを聴きたくて買ったのだが、意外に全編で名演奏だったのには驚いた。この中で、一番魅かれた曲が20番だったのである。これを聞いた時には、甘美な悲痛とはこのように表現するのかと驚嘆した覚えがある。急いで原ピアノ曲を聴いた。美しく悲哀が歌われている。しかも、想いはかること限りない優しさをこめて。本当の慕情とは、身勝手に一方的な告白でなく、献身的で思いやりに溢れた無報酬のラブが「至上の愛」だと教えてくれる。ジョン・コルトレーンの名曲“A Love Supreme”を引用してしまったが。これまで、少なくとも10回以上、居眠りで聴き飛ばしたことを悔いた。実に、珠玉のノクターンだったのだ。

そして、それを友人に伝えたが、「私が聞いたのはピアニストだ」と冷たい返事。そう、僕も一方的に僕の感傷だけに囚われたから仕方ない。よくよく調べたら、映画でのピアニストは二流で歴史に埋もれてしまった人だったから、それ以上、話をしなかった。でも、その映画ではノクターン20番のほか、ショパンのバラード第1番がフル演奏されて、この名演に救われた。このバラードは、深遠な浪漫で充実した名曲である。

（映画の概説：第二次大戦の戦火をポーランドで奇跡的に生き延びた実在のユダヤ人ピアニスト、ウラディスワフ・シュピルマンの実体験を綴った回想録を基に映画化。ポーランドのアウシュビッツ収容所

(ユダヤ人の毒ガス大量虐殺場)に強制収容される直前のワルシャワのゲットー(ユダヤ人強制収容区)から脱出して市内でネズミのように生き延びた、凄まじいほどの生命力に圧倒される。)

主題がバラードに落ち込みそうなので、ここで、ショパンに少し触れてみたい。

この人は、神経質で病弱で美人コンプレックスであっても、オダギリジョーに似てダンディな貴公子のようであったそうだ。総じて、どうしようもないパリの優男^{やきおとこ}という印象が一般的であろう。でも、曲を聴いてみると、意外にノスタルジア：郷愁^{きょうしゅう}に深い根をおろしている。その代表が、生れ故郷のポーランドを彷彿^{ほうふつ}させるマズルカであり、ポロネーズである。特に、マズルカではさりげないけど忘却できない郷愁の想いが込められている。全部で59曲もあるから、聴くだけでも最初からあぐりするのが常人である。でも、その中のいくつかが妙に輝^{かがや}いていたことは忘れられない。

いずれにしても、世界中の若手ピアニストが目指すのは、ベートーヴェンかショパンであり、二択しか許さないのも厳しい現実である。ショパンで名をあげたマウリツィオ・ポリーニだけは、次第にベートーヴェンに移行してきた唯一の巨匠と言っても間違いはない。昨今は、新進気鋭の若手女性ピアニストが、いきなりベートーヴェンに挑んでおり堂目している。日本人若手の小菅優もピアノ・ソナタ：32曲の全曲演奏・録音に挑戦した。頼もしいやら、木曾義仲の妻であり女豪傑で有名な巴御前^{あかし}みたいでぞっとするが、時代が変遷した証^{あかし}でもあろう。

最近の若手ホープの盲目ピアニスト辻井伸行君は両方に挑戦しているが、挫折が早まるだけであり、若い時には自殺行為でもある。極致の芸は、本気で魂を捧げないと弾けないのだから。二つに手を出すことは不可能というか無理なのである。世界最高のマルタ・アルゲリッチでさえも、60歳を過ぎて様々な体験を経てからポツポツとベートーヴェンを弾き出したほどである。それから、同じ盲目であって、20世紀のヴィルトゥオーゾであったヘルムート・ヴァルヒャでも、自らのドメインをバッハに集中して生涯を捧げてきたほどなのである。

僕の愛聴アルバムは、クラウディオ・アラウ盤である。学生時代は、ルービンシュタイン盤であったが。

言いたいことは、甘美な悲哀を込めた音楽には、思いやりが醸^{かも}し出されていなければ、ただのセンチメンタルで味気ないし、逆に、聴く人はその辺りを選別^{みぎ}できる感性が磨かれなければ感受できない、ということであろうか。

珠玉 とは、真珠と中国の玉(ぎょく)を混ぜたものだが、珠(たま)のような玉は「その瓦礫に在るが如し」が原典である。すなわち、ゴミの中に埋もれているのだ。小川の砂金、野原の桔梗、野生の麒麟児などに例えられよう。ちなみに、玉は薄い緑色の柔らかな感触の石である。奥深い溪谷の谷川の瓦礫と一緒にある。そして、でかいものは、加工されて「璧」という装飾品になって中国3千年前の王侯貴族の権威とされた。色に濁りなく、中に疵なく、完全なものを「完璧」という。璧という字も玉が礎石になっているではないか。

ショパンの嬰ハ短調

2018年7月21日 別当勉

この人は、ただひたすらにピアノに人生を捧げたとしか言いようがない。その^{はかな}儂い花の生涯は、それを迎える者にとって、何故か、桜を想像してしまう。一方、平均律クラヴィア曲集を残したバッハ、そして32曲ものピアノ・ソナタを書き上げたベートーヴェンを思い浮かべれば、ドイツにおけるクラヴィアからフォルテピアノに鍵盤楽器が発達してきた歴史の終点を、パリの名器プレイエルで華やげたとも言える。それを弱小国のポーランド人がパリで成し遂げたことから、文化交流が頻繁なヨーロッパの国々を^{あやど}綾取っていることが判り、日本人には不思議でならない。それほど、欧州という国々の集まりは、言葉は違っても緊密に^{つな}繋ぎ合ってきたことに驚嘆する。国境を地面も地図上も線で引くしかなかったのだから。イギリスや日本には、それが無い。



www.piano.or.jp/report/04ess/prs_cpn/images/004_02_eumap_b.jpg

2千年も隣国どうしの戦乱や動乱が絶えず、しまいには世界大戦に発展するほど。二次の大戦でそれぞれ2千万人以上の戦死者・犠牲者を出してきたことは、私たちの記憶に新しい。やっと欧州連合：EUが生まれた背景がようやく解ってくる。

ショパンが生まれ育った19世紀のポーランドは、国の体をほとんど成していなかった。彼が20歳（1830年）でウィーンに上京していたとき、ワルシャワで革命政府軍が蜂起したが、あえなくロシア帝国に鎮圧されてしまった。このように絶えずロシアの管轄ないしは傀儡政権で抑圧されてきた。しかしながら、彼が幼少期から青年期においては、かりそめながらも平和が続き、教育者である父、それから母と姉に温かく育まれてきて、早くからピアノ演奏と作曲に天賦の才能を発揮して磨いてきたことは、彼の脳裏から離れなかったという。また、ポーランドの美しい田園風景に加えて、農民のおおらかな祭りと素朴な舞踊は、彼の精神を根本から郷土色に染め抜いたことも、ショパンの作品を一覧すれば明らかである。幼少時代、両親からの愛情あるいは育った環境での感傷というのは、私たち幾つになっても、ときどきその懐かしさに浸るように、人の魂の心柱を担っているのである。だから、少年時代にそれが壊されるとかなりの精神的打撃が残ることになる。

これほど郷土に死ぬまで執心した作曲家は、ショパンぐらいしか見当たらない。これを理解しないと、ショパンの作品の襞に触れることまで及ばないから、まず、ポピュラー・クラシックしか聴いてない人々には、60曲ほどのマズルカは視野に入らないできている。マズルカで何が一番か、即座に挙げられるショパン・ファンがいたら、私はすみやかに脱帽する。

想えば、ベートーヴェンはそういった境遇に恵まれなかった人であった。早逝した母、暴力的なスパルタ教育者の父も亡くなって、まだ成人していないのに弟二人の面倒をみななければならない。しかも、彼には特段の感傷もない大河のライン縁の古都ボンで生まれ育った。美しい幼少時代の思い出は皆無だった。普通なら、背骨が曲がってひねくれた性格の青年に育ったにちがいない。けれども、彼には、魂に朗々と響く音楽があった。それに導かれた素直な精神が、ひねた少年の背骨を石膏で固めて真っ直ぐに矯正してくれた。育ちは違ってもこの二人の青年は、音楽という魂の膏葉に包まれて育ったのだ。しかも二人は、ピアノをこよなく愛したことにおいて酷似している。ベートーヴェンはイギリスの名機ブロードウッド、ショパンはパリのプレイエルという、フォルテピアノを愛用した。

そして、二人とも抗しがたい疾病という悪魔と闘った。そんなことは、言わずもがなではあるが、なにも無理に二人を結び付けることではない。ショパンは、ベートーヴェンのピアノ三重奏曲「大公」にいたく感銘したことは事実である。

しかし、ショパンの深い興味と作曲への傾倒は、バッハとモーツァルトの作品に注がれたようである。それらの作品については、おいおい、紹介していくことになる。

シューマン (1810 - 1856)

人の評価というものは、まったくの他人により効果的になされる。いくら自己宣伝しても、親兄弟がいくら誉めても、郷土の人々がいくらPRしても、それだけでは拡がらない。でも、たった一人の他国の見知らぬ有名人が一言讃^{たた}えただけで、大きな注目を浴びてしまう。すなわち、人や物の評価や価値判断は、なるべく遠くからなされることが最大の宣伝効果を産むのである。一切の身^み最^び貴^いが無いからであろう。

ショパンの作品について、そんな役割を果たした人がライプツィヒのロベルト・シューマンであった。彼は、ショパンと同年であり、音楽史的には、ドイツ・ロマン派の旗頭でもある。彼が21歳の時にショパンの

「ラ・チ・ダレム・ダ・ラ・マーノ変奏曲」

モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』の主題による変奏曲 変ロ長調 作品2

<https://www.youtube.com/watch?v=xRNOghTFsm8>

の楽譜を一読して感動し、即座に、ライプツィヒの一般音楽時報誌（1831年12月）に、

『諸君、脱帽せよ、天才の登場だ！』

と評論したことは有名な逸話として伝えられてきた。

ショパンには会っていないし、演奏を聴いたこともない。楽才どうしのコミュニケーションというのは、楽譜だけで成されるのだから、私たち素人には想像が及ばない。これが、世論を賑わせた。「ラ・チ・ダレム・ダ・ラ・マーノ」とは「(奥様)お手をどうぞ」という意味であり、モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」のなかの有名な二重唱のアリアで、それを主題として変奏曲をショパンが書いたのだ。なんと17歳である。実際に、18歳でウィーンに旅行したときに、その芸術の都で運よく演奏会を開けて、披露し、喝采を浴びたという。当然ながら、このことは故郷のワルシャワにも伝わり、やはり神童であったかと彼は英雄視されることになった。

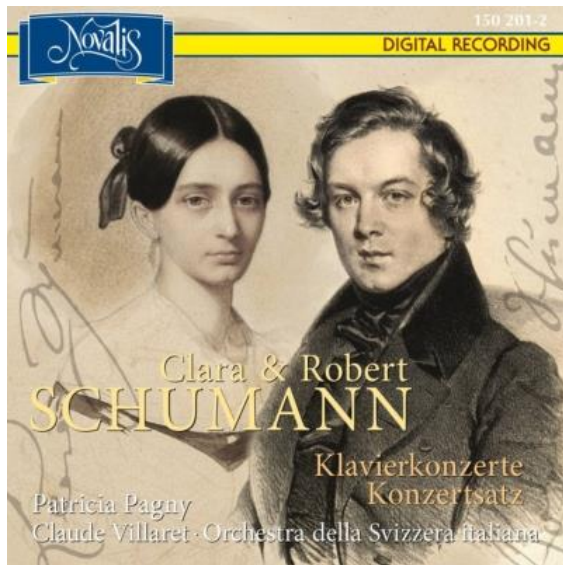
シューマンは、その評論の音楽誌をパリのショパンに送った。ショパンは面映ゆかったが、嬉しく感じた。さらに、シューマンは彼の編集による評論誌にショパンの他の作品紹介と称賛を書き続けたほど、ショパンを隅には置かなかつた。それ以上に、21歳でパリ・デビューしたばかりの彼には大きな追い風になったことは疑いない。

そして、数年後に、26歳になったショパンは、ライプツィヒのシューマンを訪ねて、礼を言った。この時に、シューマンと意気投合し、互いに演奏を披露しあつた。シューマンは、ショパンの

バラード第1番 ト短調 作品23 (1836年出版)

<https://www.youtube.com/watch?v=7bTAeOhIoJI>

ほめたを褒め讃えたという。そこで、ショパンは作曲中のバラード第2番を献呈することにし、シューマンからは「クライスレリアーナ」が贈られた。



クララとロベルト・シューマン

<http://www.hmv.co.jp/en/productitemstock/stock/5349716>

シューマンからは「クライスレリアーナ」が贈られた。英才どうしの微笑ましい対話とはこういうものであろう。ショパンはさらに、居合わせた才色兼備のクララ・ヴィーク：16歳（やがてのクララ・シューマン）に目と耳を奪われた。しかも、ショパンの練習曲作品10を演奏して聴かせられたが、これがショパン・オリジナルの情感をピタリと突くものだったから、感激ひとしお一入だったらしい。さすがに、ドレスデンで会ったばかりの最愛ひとの女：マリア・ヴォジンスカも16歳だったから、そのイメージが重なることにより、ことさらに感銘を深めたことは想像に難くない。

バラードは、音楽史上、ショパンが初めて用いた曲想である。ポーランドの愛国詩人アダム・ミツキエヴィチ（1798～1855）の詩から彼がインスピレーションを得て生まれたものと、シューマンが伝えている。とにかく、ミツキエヴィチの詩集“バラードとロマンス”に由来して“バラード”と名付けられたようである。

====下田幸二著「ショパン全曲解説」より====

バラード第1番は、アルフレッド・コルトー（1877～1962）というフランスの名ピアニストによれば、「コンラード・ヴァーレンロッド」の第4章最後のエピソードに依るものだが、真偽のほどは誰も知らない。

ミツキエヴィチの劇詩は、以下のとおり。

時は中世、リトアニアの少年アルフは、十字軍との戦いで十字軍に拉致され、その司令官に息子のように育てられたが、リトアニアに戻り、王女と結婚する。しかし、十字軍に支配されるリトアニアの低い地位に落とされ、リトアニアの再興を誓う。彼の企みは、十字軍の英雄：コンラード・ヴァーレンロッドを名乗り、十字軍に入り込んで司令官となって、わざと誤った指令を出し、十字軍を崩壊に導くことだった。果たしてリトアニアは勝利した。しかし、十字軍を裏切ったコンラードは自決するのだった……

なお、第4章は、十字軍の戦勝祝いの晩餐で、リトアニアの運命を語る老人とコンラードとのやりとりの場である。最後のエピソードは、コンラードが語るバラードで、アラブ：ムーア人とスペインの戦いにおいて、ペストに罹患したムーア人の王アルマンゾーがスペイン軍に取

り入って紛れ込み、スペイン軍を病気で滅ぼした・・・・・・という。自身の立場を酒の酔いに紛らわして比喩的に匂わす、謎を秘めた場面である。

=====

バラード第1番は、1835年頃、ショパンが25歳のときに、ドウ・シュトックハウゼン男爵に献呈していたから、ショパンは次作である第2番をシューマンに捧げたいとした。

いずれにしても、バラード第1番がショパンの最高傑作であることは、誰しも否定できないし、シューマンの慧眼が見事にそれを見抜いていたことには驚きを禁じ得ない。つまり、彼の鋭い審美眼は当然として、聴衆の一人である私も審美していたことに自負して驚いているのである。この名作には、そのものすごいドラマティックな展開と華麗さに、50年間に亘って私も度肝を幾度も抜かれてきた。映画「戦場のピアニスト」のクライマックスで弾かれたことは、ロマン・ポランスキー監督の鋭い狙いにも合点した。まさに、ショパンを聴いて語るなら決して外せない名曲なのだから。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第23番「アパッショナータ」と並んで双璧とも言える「魂の叫び」であろう。

リスト (1811 - 1886)

ショパンは、1830年、ワルシャワ市民からの手厚い壮行声援を受け、20歳で故郷のポーランドを巣立ち、ウィーンを訪れた。前年に旅行したときに、幸運にもコンサートを開くことができ、喝采を浴びたことから気分よく滞在したが、同じ柳の下にドジョウはいなかった。予想外に冷たくあしらわれ、落胆した。かろうじて、1827年に他界したベートーヴェンの主治医だったマルファッティ医師に会うことが出来て、懇切な待遇を受け、パリに行くならということで、パエルという有力者への紹介状を託された。

傷心を抱えながらも、1831年にパリに着いたときには、そのパエルから紹介されたカルクブレンナーという名ピアニストにショパンの才能が瞠目され、さっそく、彼の支援を受けて1832年2月に、デヴュー・コンサートをプレイエル・ホールで開催できた。これが、パリ市民から絶賛を浴びたのである。

ピアノ協奏曲第1番ホ短調 (作品11:20歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=BvzGQPa132M>

のほか、ウィーンでも称賛された「ラ・チ・ダレム・ダ・ラ・マーノ変奏曲」も演奏され、権威ある音楽誌「ルヴュ・ミュージカル」の編集長に取り上げられ、絶大な評論がなされたのだから、歓びはひとかたならず、確かな自信を持った。この若者は、内心、故郷ポーランドの両親や、恩師ならびに多くの支援者に向けて、ようやく、胸を張れたにちがいない。ライプツィッヒのシューマンにも聞こえたことだろう。

そのコンサートでは、ロマン派の旗頭になるフランツ・リスト (1811~1886) もフェリックス・メンデルスゾーン (1809~1847) も聴いていたのである。たぶん、この時のショパンの演奏に彼らの眼がギラリと光ったことは想像に余りある。彼らの仲間、今は有名でない作曲家フェルディナンド・ヒラーがおり、既にショパンの親密な友人となっていた。このヒラーを介して、ショパンは一つ年下のフランツ・リスト (1811~1886) と知り合い、二人の麒麟児はこの時から終生のかつ究極のライバルになった。ただし、どちらかという、その意識はリストの方が強く、ショパンは意外に冷めていたという。とにかく、10歳のリストは楽聖ベートーヴェンに頭を撫でられた金獅子賞並みの経歴を持っているから、全くの無視はできない。

フランツ・リスト



リストは、情熱的でエネルギッシュなピアノ演奏が持ち前で、クロスハンドも含めて腕と指が鍵盤上を跳ね回る牛若丸のごときアクロバットを得意としていた。これを「ブラヴーラ奏法」

と言うらしい。ブラヴァーラ (Bravour) とは、ヴィルトゥオーゾ的な^{しゃくねつ}灼熱の名人芸の輝きのことである。これで、ヨーロッパ中に名を轟^{とどろ}かせた神童であった。ただし、ベートーヴェンの弟子であったチェルニーを師匠として育成されたから、さすがに流儀の真髓は極められていた。

当時のパリのピアニストたち

これに対して、ショパンは繊細で柔軟に優美に弾くスタイルに徹していた。特に、^{うんしほう}運指法には独特なものがあり、これが鍵盤上を跳ねるカエルを追う蛇のようであったと伝えられている。その指の使い方、彼のダンディな服装と相まって貴公子然とした態度も含めて、パリの伯爵夫人や令嬢たちをことごとく魅了したのだ。我が国の人気俳優である玉木宏を思い浮かべればよいのではないだろうか。彼が出演したTVドラマ「のだめカンタービレ：2006～2008年」を観れば、一目瞭然と言えよう。とにかく、女性はスラリとしたダ



前列左からヴォルフ、ヘンゼルト、リスト、後列左からローゼンハイム、デーラー、ショパン、ドライシク、タールベルク

www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen/7602/page8.html

ンディに弱い。まして、その彼が哀愁を帯びたピアノ曲を弾いたら瞬間的に^{とりこ}虜にされてしまうのは、火を見るよりも明らかであり、そこら中の男たちがいくら妬^{ねた}んでも話にもならない。

大富豪ジェイムズ・ド・ロスチャイルド男爵の令嬢ベッティと、その娘シャルロットもそろって弟子入りを願って果たせたことが、パリ中に広まった。しかも、シャルロットの幼い娘マチルドまで三代での弟子入りだから、半端なセンセーションではなかった。こうしたシャルロットの熱意に感じ入ったショパンは、次の有名すぎるワルツなどを彼女に捧げた。

ワルツ第7番 嬰ハ短調 作品64の2

<https://www.youtube.com/watch?v=gN8U0mTgsxI>

しかして、教授料；1回20フラン（今の相場で約4万円^註）とはいえ、多くの子弟を抱えることになって、作曲・出版以上に生計を支えたのである。金持ち貴族の息女がいくら希望しても才能が認められなければ、ショパンからきっぱりと断られたというから、^{えりごの}選好みが激しかった。しかし、決して^{どんよく}貪欲にならなかった。あくまでも作曲活動を中心にしていたので。レッスンは、貴族の^{やかた}館並みに内装と家具を整えた彼の自宅アパートで行うが、だいたい1回につき1～5時間で、1日最大5人ほど稽古をつけた。ピアノは、いつもプレイエルのコンサート・グランドを子弟たちに使わせるが、彼の教師としての演奏用にプレイエルの縦型ピアノがもう一台あったと言われている。

演奏の舞台について、彼は、リストとは違って大観衆コンサートが嫌いだった。なによりもこよなく好きだったのが、20人ほどの聴衆を集めたサロン演奏だったという。当時、パリで流行り出した「^{やかい}夜会」である。これも参加費：一人20フランで、場所もその都度変えて、特

に通知せずに常連と相談して行うのが常だったようだ。彼のつむぐ打鍵音は、リストの大音響とは反対に、柔らかく小さかったから、親しい貴族のサロンを好んだとも伝えられている。このため、それにマッチした“**プレイエル**”というフォルテピアノをこよなく愛した。現代ピアノにかなり近い音を奏でられるパリ一番の名機である。ちなみに、リストは**エラール**だったという。

授業料もサロン入場料も高額だったのは、パリの貴族たちがこぞって決めたという。貴重なショパンを自分たちの世界で囲い込みたかったのだ。その中で、歌手でもあるデルフィナ・ポトツカ伯爵夫人がいて、豪華なサロンを持ち、ショパンに執心し、彼のパリ生活を絶え間なく最後まで応援した。貴族の子息たちも「教授はショパン先生」という箔がついて、高額でもショパンの人気は高まるばかりだった。

[註] 当時の1フランの価値

<説1>

現在金1グラムの小売値は4900円くらいです。

1フランあたりは322.58mgですが、金貨の品位は900でしたので、 $0.32258g \times 0.9 \times 4900円 =$ 約1423円となりますので、金の価値で換算すると1423円となります。

当時のフランスの物価と比較しますと、下のサイトではレミゼラブル時代の考証をして、

労賃を基準にすると、1フラン=5000円、

食糧を基準にすると、1フラン=2000円、

物(衣類、生活道具)を基準にすると、1フラン= 500円

<https://ameblo.jp/meisakian-times/entry-10451112515.html>

<説2> 林 倫恵子, 第12回 ショパン先生のピアノ・レッスン

20フランという高額なレッスン料であったという。ちなみに当時の20フランは、最近の(今はユーロになってしまったが)5000フランに該当するらしい。(1997年のレートでは1フラン=23円)というわけで、ショパン先生の1回のレッスン料は現在の日本円に直すと10万円を超える額になるのである。ショパンは1日(といっても費やす時間は半日)に5、6人ほど教えていたので、これだけで相当の収入になった。(1日で60万円~70万円近く、稼いでいたことになる・・・)

https://www.piano.or.jp/report/01cmp/c_chopin/2004/03/26_4661.html

<説3>

ショパンは着道楽で専用馬車も保有するなど貴族並みの生活をしていたとされる。そんなショパンの収入を平野啓一郎氏は18,000フランとしているが(「葬送」)、これも1フラン=1,000円で計算すると1800万円となり、貴族的な生活は支えられない額となってしまう。参考資料「ヨーロッパの近世」には平均的貴族の年収が1万ポンドとあるが、“Cost of living in Victorian England”に示されている平均年収(1888年の660ポンドが2006年の57,691米ドル相当)より1ポンドが約87ドル相当とわかるので、当時の1万ポンド=今の約87万ドル、すなわち約8700万円となる。これが平均的貴族の年収であったとすると、

1フラン=6,000円

で計算してショパンの年収は約1億円あったとした方が、つじつまが合う。

<http://www.jaist.ac.jp/~fuji/wp/?p=2575>

大音量と曲芸師のような演奏スタイルのリストは、このポーランド人の奏でる繊細で洗練さ

れたピアノ曲以上に、音楽の作曲にいたく感動したという。リストは、まだ、現在の私たちが好んで鑑賞するような彼独自の作品創作まで到達していなかったから、余計に感銘を受けたらしい。ショパンと付き合い始めた頃は、有名オペラの主題を変奏するなど、小品しか書いていなかった。ショパンの曲の深遠な響きと芸術性に感じ入り、真の芸術とは『先ず創り出すこと』であるべきとの一念で、おのれに取り込もうとしていたのだ。ショパンが出る夜会には、毎度のように参加していたらしい。

次に掲げる二人の作品を比較試聴すると、リストのショパン研究の成果がわかるような気がする。曲調が酷似している。

ショパン17歳（1827年） ノクターン第19番 ホ短調 作品72の1（遺作）

<https://www.youtube.com/watch?v=3iH1ONnXrdY>

リスト38歳（1849年） コンソレーション（慰め）第3番 変二長調

<https://www.youtube.com/watch?v=4a0DheeUZjo>

この2曲をフジコ・ヘミングのCDで聴いたときには、愕然として納得した。それほどリストはショパンに傾倒していたのだと、フジコが教えてくれた。リストのコンソレーション第3番の作曲年は、奇しくもショパンが他界した年である。ショパンへの哀悼が薫る。

=====
バルバラ・スモレンスカ=ジェリンスカ『ショパンの生涯』より=====
あるとき、リストはショパンの曲を初見で弾き通せたのに、ショパンの

「練習曲：12曲 作品10」

の譜を渡された時、うまく弾けないということがあった。その直後に、リストは忽然として姿を消した。パリから失踪したらしい。さまざまな憶測が飛び交った。数週間後、彼はショパンの<練習曲集>を、そのメリハリの付け方や、細かなニュアンスを一人で研究し、毎日何時間もかけて練習していたことが判った。この余りに斬新な傑作の意味を消化するまでには、それだけの時間を必要としたのだ。そして、その研究成果をショパンと友人たちに披露した時のこと、曲の作者自身が驚嘆し、リストは自分より見事に弾いたと認めたのである。彼はこの<練習曲作品10>をリストに献呈した。

「自分のペンがいったい何を書いているのか、解らないままに書いていた。というのも、いま、リストが僕の練習曲を弾いていて、僕をまともな思考の圏外に追いやるのだ。僕の作品をどう弾けばいいのか、僕は彼から盗みたい。」

リストとフランコムと三人で、ヒラー宛に悪戯半分の手紙を書きながら、ショパンはそう告白している。（1833年6月20日）

=====

このエピソードは、ショパンの創作レベルが如何に凄いものであったかを如実に物語っている。

る。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ32曲を踏破したはずのリストが動揺したのだから。さすがに、それを嚙みこなしたリストの才能も桁外れであった。それに素直に肯いて献上したショパンの友情も好ましい限りである。典型的な麗しきライバル関係、つまり「汝の敵を愛せよ」とも言えよう。

なお、「練習曲作品25（27歳）」は、リストの愛人：マリー・ダグー伯爵夫人に献上された。

練習曲 作品25-1 「エオリアン・ハーブ」

エオリアン・ハーブ

<https://www.youtube.com/watch?v=X1o-m4uEXjI>

エオリアン・ハーブは弦楽器の一種。ウインド・ハーブとも呼ばれる。自然に吹く風により音を鳴らす。ギリシャ神話の風神アイオロスに由来する。ショパンの練習曲Op. 25-1を聞いたシューマンの「まるでエオリアンハーブを聞いているようだ」という感想から、この曲の愛称としても知られる。



リストのプライベートでは、ダグー伯爵と別れたマリー・ダグー伯爵夫人が愛人であり、二人の間にコジマ（1837-1930）が生まれる。やがて、リストの一番弟子であった名指揮者ハンス・フォン・ビューロー（1830-1894）と結婚した。ビューローはワーグナー楽劇などの指揮者としても著名である。コジマは、数年後にビューローと別れ、ドイツ伝説楽劇の作曲家リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）に魅了されて再婚する。最初の男子が生まれたとき、産褥のコジマが目覚ます朝、ワーグナーは、1階のサロンに並べた室内楽団に穏やかで慰安に満ちた「ジークフリート牧歌」を演奏させて彼女の奮闘への称賛を献じたという。この曲は、「ニーベルングの指環4部作」のうち第3部「ジークフリート」のメインテーマで使われるものであった。余りにも有名すぎる逸話である。

こうしてリストの友人たちを眺めてみると、彼は、当時のクラシック業界の類い稀なドンであったことが判る。リストが、ショパンからワーグナーへとステップする縁は私の未開拓分野であるが、ワーグナーもリストも、あたかも兄弟のようにベートーヴェンに傾倒していた。

マリア・ヴォジンスカ

哀愁とは、^{かな}哀しく^{うれ}愁いることなり。

そんな一大事がショパンに起きた。1835年、彼が25歳の時である。たまたま、両親がチェコの保養地カールスバートに療養に来ていたので、喜び勇んで訪れた。というのは、彼はパリのロシア大使館からのロシア宮廷音楽家として認定したいという誘いを拒否したという背景がある。故国ポーランドを踏みにじったロシアだから当然ともいえる。結果、パリ在住の亡命者になったので、ロシア政権下にあるポーランドに一時帰郷すらできなかつたのである。5年ぶりの親との再会は、彼を非常に喜ばした。両親も心配していた愛息に会えて感激ひとしおだったという。

マリア自画像に基づくミニアチュア

一方、ザクセンのドレスデンにヴォジンスキの一家が、ロシアに叛旗をひるがえしたワルシャワ蜂起が鎮圧されてのち、難を逃れて移住していた。ヴォジンスキ3兄弟は、ショパンの父が営んでいた寄宿舎にいて、友人関係にあったので、そこをパリに帰る途中に訪れたのである。そこで邂逅した9歳年下のマリア・ヴォジンスカに、ショパンは魅了された。まさに、^{かぐわ}香しいブランドーが体内に染みてくるように痺れた。ワルシャワ時代にショパンがピアノを教えたときは10歳の少女であったが、才色兼備の16歳の乙女に成長していた。すでに、在ワルシャワのフランス領事の伯爵から結婚を申し込まれたほどだから、並みの才女ではなかつた。



マリア・ヴォジンスカ

http://yamamotoganka1.com/death_of_bach.htm

マリアは子供の頃見知っていた、今や時代の^{ちょうじ}寵児となっていたショパンを想い、彼の作品をたびたび弾いていた。彼女が書いた曲をショパンに送り、ショパンはその返礼に、とても明るく輝いている次のワルツを贈って、ヴォジンスキ一家ともども文通してきたのである。

ワルツ第1番 変ホ長調「華麗なる大円舞曲」作品18 (24歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=MK2pbvKw82o>

この曲は、後に、ローラ・ホースフォード嬢に献呈されたが。

母のテレサにも頼まれて、そのマリアに、訪れたドレスデンでレッスンをした時には、マリアは、あたかも白雪姫の「いつか王子様が：Someday My Prince will Come.」のごとく、現実に来てくれた、いや、迎えにきてくれたような情感に包まれた。二人は翌年の再会を約束してわかれたが、この時に、僅かな間の別れを^{しの}偲んで、次の曲を書いていた。これがやがてホントの別離になるとは誰が予想したろうか。

ワルツ第9番 変イ長調 作品69の1 (遺作)：別れのワルツ

https://www.youtube.com/watch?v=6LwJnAek_cE

そして、この旅の二番目の目的地ライプツィヒに寄って、シューマンに会ったことは既に述べた。1835年8月から旅立ち10月にパリに帰ったが、3ヶ月の長旅だった。もともと虚弱体質であったから、終わり頃には高熱を発して衰弱したので、養生しながら帰り着いた。余りにも神経過敏になるのも仕方ないほど、いろいろな出会いに、ひ弱な心身は振り回された。

パリのアパートには、マリアからの手紙が待っていた。ラヴ・レターとは言えないまでも、感情を紛らわしたものであった。ただ、結びに「もしも私が空のお日様だったなら、きっと貴方のためにだけ照るでしょう。」と書かれていた。これは、ショパン19歳の時の歌曲「願い」

マリア・ヴォジンスカが描いた
ショパンの肖像



http://www.allposters.co.jp/~sp/フレデリック・ショパン-Posters_i12065956_.htm

作品74の1の一節を引いたものだった。彼女が、ショパンの作品を熱心に収集して研究してきたことが明らかになり、ショパンはマリアの想いを感じ取った。

過酷な運命は、彼の長旅の疲労を一挙に放出した。翌11月に、ショパンは咯血して倒れたのだ。

それでも、友人マトシンスキの親身の看病により、回復したのだから運命は見捨てなかった。そして、再び1836年7月にマリエンバートに出かけ、ヴォジンスカ夫人のテレサとマリアに会い、求婚した。条件付きで婚約が母親テレサに受け容れられた。それは、健康管理と暫定的な様子見の試験期間であったが、彼は有頂天になってしまった。

マリアもこの時にショパンの肖像を水彩で描いた。これは今でも最盛期の彼を写した最もリアルなものとして、万人が認めるものとなってきている。

同時期に、ショパンは八つの歌曲の音楽帖に付けて次の名曲もマリアに送った。

ノクターン第20番 嬰ハ短調（遺作）ショパン20歳

<https://www.youtube.com/watch?v=vkEuUf2F13c>

プロローグで述べたように、この名曲が彼の魂の旅路のどこに当てはまるのか不明だった。遺作とは、出版されずに、すなわち作品番号が付けられずにショパンの遺品あるいは友人たちが大事にしまっていた作品が、死後に掘り出されて出版されたものをいう。この最高傑作は、姉ルドヴィカに贈られたという歴史ばかりが残されているが。だとすれば、姉の気持ちは困ってしまったに違いない。親兄弟に宛てるようなものではないから、私は不可思議な想いに染まってきた。ようやく、小坂裕子著作の『ショパン』にて、マリアにそっと贈られていたことが判明した。小坂女史の慧眼けいがんによる後付けという疑問は消えないが、私はそうでなきゃ如何と断

じている。私の心に消えてくれなかった ^{わだかま} 蟠 ^{こんべき} りが紺碧に晴れ上がったのだから。

すなわち、ショパンの『至上の愛：A Love Supreme』は、マリアに捧げられたのである。チョン・キョンファのヴァイオリン独奏で聴いてみれば、誰しも否定はできなくなる。

ノクターン第20番 嬰ハ短調（遺作）

レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ

緩やかに、おおいに表情を込めて

ナタン・ミルシテイン編曲、ヴァイオリン：千住真理子

<https://www.youtube.com/watch?v=9PtQGdRNZJk>

（残念ながら、チョン・キョンファの空前の名演は見当たらない。）

しかし、なんという愛おしさ、ひたむきな慕情が切なげに唄われながら、聴き手に迫ってくる。しかも幻想的だ。これほど男の哀愁が吐露^{とろ}されているものは、私は、ほとんど聴いたことがない。マリアが受けとれていたかどうかは怪しい。これを聴いた花嫁は、両親も故郷も何もかも捨てて、身一つでパリに駆け込んだはずなのだが。若すぎた、これほどのラブ・ソングを解するには。

26歳のショパンは、マリアの母テレサから健康管理など、こと細かに、毎日11時前の就寝とか、食事療法、毛糸の靴下とぼたぼたの靴を履くことなど、クソ食らえだったにちがいない。私のような凡人でも、その年頃はそうだった。ましておや、ショパンには、作曲、夜会、レッスンなど芸術家として、パリの貴族たちから引く手あまたであったのだから、無視してしまったことは容易に想像がつく。

そして、終に、1937年2月、感冒にかかり寝込んでしまった。これらのほかに、無節制な夜会や私生活などがテレサ夫人に克明に通報された。彼女の息子アントニがパリにいて、ショパンの親しい友人の一人でもあったから、図らずもスパイがいたのである。親思いのマリアは両親から説得され、婚約は取り消された。マリアからの最後の手紙を受け取ってから、過去のレターをひとまとめに

『我が哀しみ：Moja bieda』右写真
として、釈然としないまま、全てをショパンは封印した。

練習曲 作品25-12 ハ短調

<https://www.youtube.com/watch?v=RFPCy2h-H9E>



そして、マリアへの恋慕とやりとりを韜晦^{とうかい}した。誰にも告げずに、手紙でも愚痴すら吐かずに一切を魂の中に閉じ込めたと言われている。韜晦とは、包み隠すことを意味する。

それでも、彼は幼少時代から優柔不断の性格を持っており、彼の心から、いつまでもマリア

への哀愁を消すことは出来なかったと言われてきているが。そのように彼の個性のせいにするのは、いまの私たちが考えても酷い話である。ショパンの魂の揺れは、きわめて当然である。それよりも、娘への愛に盲目となるテレサ夫人が、ショパンをボヘミアン*音楽家と見ていたとしか考えられないことの方が重要であろう。ショパンの天を突く昇竜のような価値が見えていなかったことが、この事態の問題である。やはり、小人の視界とはそんな程度であろうか。旦那がポーランドの田舎領主で、安楽生活が保証されていたとはいえ、絶好の機会を逃した。マリアにとっても、あんまりだ。

* ボヘミアンとは：

チェコの西部から中部にかけての地方・ヴルタヴァ川流域の盆地をボヘミアと呼ぶ。そこに住んでいる人たちのことをボヘミアンと呼んでいたことが由来になる。ボヘミアンの意味は、原義は故地喪失者、いわゆるジプシー(流浪の人々)という意味になる。ヨーロッパは地続きということもあり、戦争や人種差別などの歴史的背景のなかで出身国を追われる人が多かった。亡命してもともと持っていたはずの自分の国のアイデンティティを失ってしまった人たちのことをボヘミアンと呼ぶので、本来の意味はあまりいい意味ではなかった。

ボヘミアンがこのような意味に変わっていたのは19世紀以降フランスで、特にパリで『定職を持たず伝統や因習にこだわらない自由奔放な生活を愛する芸術家グループ』をボヘミアン・アーティストと呼ぶようになり、それをきっかけにボヘミアンの意味は本来のものから変わってきた。

<<http://1k-life.com/647.html>>

歴史は正直である。一介のポーランド人がピアノで世界を制したことを、国家の宝としてポーランドが抱擁して来ているのだから。仮に、マリアをショパン夫人にしていたら、娘がワルシャワのショパン博物館にショパンと並んで永遠に祀られたことは間違いない。ヴォジンスキの一族も、ポーランドの誉れとして、未来永劫、世界中に語り継がれていくのに。

「驥尾に付す」とは、良く言ったものである。

驥すなわち千里を駆ける馬かどうかを彼女は見抜けなかった、いや、察しようとしなかった。

日本漫画界の巨匠：白土三平著「カムイ伝」における言を引くが、
「流れる河の淀みに住む魚は醜い。早瀬の水は澄んできれいである。その流れに逆らって泳ぐ魚はさらに美しい。」

ショパンは、正に、そんな若者だった。頑健ではなかったものの、すでに約百曲（厳密には26歳で119曲）の作品を書いていたのだ。食べて遊んで余るほど。

作品

彼の名曲たちは、放っておいてもそれぞれが独りで歩き出して、旅に出てしまう。行くところ何処でも、人が集まって愛聴し、歓喜にふるえ、時には目頭を潤まして熱中する。あたかも、パリで亡命者になったショパン自身のように愛される。ベートーヴェンやモーツァルトとは違って、完結する小品が多いし、ピアノ演奏に熟練すれば、誰でもどの曲でも覚えられて暗譜される。かといって、ズシリと重くて中身が濃いバラードなど、20年以上の習練と人生経験を積まないと弾けないものもある。

5年毎のショパン・コンクールは、ピアノ弾きだけで、世界中の楽才キッズたちが綺羅星のごとく集まって競演する。優勝すれば、それだけで、コンサートやリサイタルに引き回され、CD録音・発売もあつという間に成し遂げられる。これほどの熱戦が展開されるコンテストは、他に見当たらない。天上のショパンが、ニンマリと不敵な笑みを浮かべているのが鮮やかに見える。

それほど弾かれても演奏されても録音・再生されても、尽きないのである。彼の作品の多様性は、正に、コンクールに最適なのであろう。参加してくるコンテストそれぞれの個性とショパン作品の解釈が拮がり、試験を受ける方が剥きになるのだから、いつまでも飽きられない。それが、ショパンの作品の大きな特徴でもある。これは、本人も意識してなかったと思われるが、彼は多くの弟子たちに優しく親身に教えながら、厳しく自己表現を求めたという。一般的には、やはり、華麗、躍動、歓喜、憂愁、甘美、悲哀、郷愁、浪漫、抒情、激情、深遠など並べ切れないほど、誉め言葉が尽きない。しかも、一貫していることは、モーツァルトに惚れ込んだように、全曲で「雅」を忘れなかった。貴婦人方に愛された所以でもあろう。

一方、演奏の合間に、ダンディな服装で、時の話題にかけて、ふざけたパントマイムを話しながら演じたが、これが非常に上手く、聴衆を大いに笑わしたと伝えられている。サロン演奏を好んだ理由もそこにあった。ファンはそれも期待して集まったらしい。かなりのエンターテイナーだった。

<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/smt/special/003/history.html>

ショパン国際ピアノコンクールが創設されたのは1927年。第一次世界大戦が終結し、ポーランドが独立国となって9年後のことだった。過去千年近くにわたって絶えず近隣諸国に領土を踏みにじられてきたポーランドは、第一次大戦中もロシア、ドイツ、オーストリアがこの地で戦い、200万ものポーランド人が敵味方に引き裂かれて殺し合うという悲劇を経験した。ワルシャワ音楽院のイェジ・ジュラヴレフ教授は、戦争で荒廃した人々の心を癒し、当時フランス音楽と考えられていたショパンの音楽をポーランドに取り戻して愛国心を鼓舞しようと考え、コンクールの創設を思い立った。

第1回のコンクールは1927年1月23日から1週間にわたってフィルハーモニーホールで開催され、第1位となったのはレフ・オポーリン(ソ連)。作曲家のドミトリー・ショスタコーヴィチ(ソ連)も参加してディブルマを得ている。

第2回は1932年に開催され、応募者は200名を超え、事前審査を経て14カ国68名が参加した。審査員の顔ぶれも国際色豊かになり、ピアニストのマルグリット・ロン、マグダ・タリアフェロ、カルロ・ゼッキ、作

- 曲家のモーリス・ラヴェル、カロル・シマノフスキなど錚々たるメンバーが揃い、今日につながるコンクールのスタイルがほぼ確立された。第1位はアレキサンダー・ウンスキー(ソ連)。
- 第3回は1937年に開催され、第1位はソ連の俊英ヤコフ・ザーク。初の日本人参加者、原智恵子、甲斐美和は、繊細で抒情的な演奏とともにあでやかな和服姿を披露し、原智恵子は「聴衆賞」を受賞した。
- 第二次世界大戦の勃発は、再びポーランドを壊滅的な危機に陥れた。ナチス・ドイツの侵攻によりワルシャワは焦土と化し、多くの市民が犠牲となった。終戦後、瓦礫の山となった旧市街広場の建物を、崩れた壁の石をひとつひとつ積み上げるように完璧に再現したポーランドの人々の不屈の精神は、民族の魂とも言えるショパンの音楽を求め、コンクールの再開を実現させた。
- 第4回；1949年、第二次世界大戦をはさんで12年ぶりに開催されたコンクールで、コンクール史上初めてハリーナ・チェルニー＝ステファンスカが地元ポーランドに優勝をもたらした。ソ連のベラ・ダヴィドヴィチと優勝を分け合ったものの、マズルカ賞、ジュラヴレフ特別賞も受賞したステファンスカの快挙にポーランド中が沸いた。
- 第5回は、戦禍で焼失したフィルハーモニーホールの再建を待って開催されたため6年後の1955年となった。バンキの匂いの残る完成したばかりのホールで華やかに開催されたコンクールは、復興の象徴とも言える出来事であった。これ以後このホールには半世紀以上にわたって、数々の名演奏とドラマが刻み込まれることになる。結果は、第1位アダム・ハラシェヴィチ(ポーランド)、第2位**ウラディーミル・アシケナー**(ソ連)、第3位フー・ツォン(中国)。日本の田中希代子は第10位となり、日本人初の入賞者となった。審査員のアルトゥーロ・ベネデッティ＝ミケランジェリは、田中希代子をもっと高く評価すべき、アシケナーとハラシェヴィチの順位を入れ替えるべきと主張し、サインを拒否してワルシャワを去った。
- 第6回；1960年の優勝者は、**マウリツィオ・ポリーニ**(イタリア)。名誉審査委員長のアルトゥール・ルービンシュタインが「審査員のうち誰があれほど見事に弾けるだろうか」と、彼の完璧な技巧とみずみずしい音楽性を称賛した逸話は有名だ。この回、日本の小林仁は名誉賞を得ている。
- 第7回；1965年の優勝者は、**マルタ・アルゲリッチ**(アルゼンチン)。圧倒的な演奏で審査員と聴衆を魅了し、第6回のポリーニと並んで現代のピアノ界を代表する大ピアニストへの道を歩み始める。この回、日本の**中村紘子**が第4位に入賞、遠藤郁子も批評家特別賞を受賞している。
- 第8回；1970年の優勝者はギャリック・オールソン(アメリカ)。日本の**内田光子**が第2位となり、これが現在に至るまで日本人最高位となっている。
- 第9回；1975年は、ハラシェヴィチの優勝以来20年ぶりにクリスティアン・ツィメルマンがポーランドに優勝をもたらし、才能豊かな新星の登場に聴衆は熱狂した。
- 第10回；1980年は、さまざまな意味でセンセーショナルな大会となった。優勝したのはベトナムの無名の青年、ダン・タイ・ソン。史上初のアジア人の優勝は大きなニュースとなったが、それ以上に人々が注目したのは、ユーゴスラヴィア出身の奇才イーヴォ・ポゴレリチが本選に進めなかったことに抗議した審査員のアルゲリッチが、「彼は天才よ」の言葉を残して審査を拒否して帰国したこと。これによってポゴレリチは一躍有名になり、国際的に活躍することとなる。日本の海老彰子は第5位に入賞。
- 第11回；1985年では、NHKのドキュメンタリー番組「ショパンコンクール～若き挑戦者たちの20日間～」によって日本に「ブーニン旋風」が巻き起こった。優勝者は19歳の**スタニスラフ・ブーニン**(19歳)。日本の小山実稚恵は第4位、第5位はジャン＝マルク・ルイサダ(フランス)。ヤマハのピアノがこの回から公式ピアノに加わり、ドキュメンタリー映像に、調律技術者の村上輝久氏、瀬川宏氏らが深夜に及ぶピアノ選びの現場ですべてのコンテストの演奏を熱心に聴いてメモを取り、ファイナルでヤマハを弾くコンテストはいなくなってもかかわらず、コンクールでは何が起きるかわからないと最後までピアノを最高の状態に調整している姿が映し出されている。
- 第12回；1990年は、史上初の第1位なしとなった。第2位はアメリカ出身のケヴィン・ケナー。この回は日本人の活躍が話題を呼んだ。第3次予選を通過した14名中7名が日本人で、現地の新聞に「7人の侍」と大きく報じられた。19歳の横山幸雄は、ヤマハCFⅢの輝くような音色を会場いっぱい飛翔させてショパンの音楽を詩情豊かに紡ぎ、みごとに第3位を獲得。ヤマハのピアノを世界にアピールした。第5位にワルシャワ留学中の高橋多佳子も入っている。
- 第13回；1995年も第1位なし、第2位をアレクセイ・スルタノフ(ロシア)、フィリップ・ジュジアーノ(フランス)が分け合い、第5位は日本の宮谷理香。1989年のヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝していたスルタノフは、結果を不満として授賞式をボイコットし、2005年に35歳の若さで夭逝した。

第 14 回 ; ミレニアムイヤーの 2000 年、中国のユンディ・リが 15 年ぶりの第 1 位に輝いた。史上最年少の 18 歳、洗練されたテクニックと清々しい演奏で聴衆を魅了し、新たな世紀の到来を感じさせた。日本の佐藤美香は第 6 位。

第 15 回 ; 2005 年の覇者はポーランド期待の新星、ラファウ・ブレハッチ。音楽に対する真摯な姿勢を感じさせる自然な解釈、美しく気品にあふれた音色、あらゆる面で群を抜いた演奏で、ツイメルマン以来 30 年ぶりにポーランドに優勝をもたらした。この回の特徴は、ブレハッチ以外の入賞者全員がアジア人だったこと。第 2 位なしの第 3 位に韓国のドンヒョク・イム、ドンミン・イム兄弟、第 4 位に日本の山本貴志、関本昌平、12 名のファイナリストの中には根津理恵子、大崎結真、工藤奈帆美・レイチェルの名前もある。公式ピアノとなったヤマハ New CFⅢ S は、12 名のファイナリスト中 4 名に選ばれ、若きコンテストたちを熱演を支えた。

(筆者挿入 : この第 15 回、辻井伸行は 17 歳で参加。ファイナリストには残れなかったが、後に「ポーランド批評家賞」を受賞した。)

第 16 回 ; 2010 年、ショパン生誕 200 年を記念した第 16 回で優勝の栄冠に輝いたのは、ユリアンナ・アヴデーエワ(ロシア)。繊細さと力強さを兼ね備えたしなやかなピアノズムでヤマハ CFX から多彩な音色を引き出し、ショパンの音楽を鮮烈に表現してアルゲリッチ以来 45 年ぶりの女性ピアニストの優勝という快挙を成し遂げた。コンクールの長い歴史の中で日本製ピアノを使用したコンテストの優勝は、これが初めて。第 4 位のエフゲニ・ボジャノフ(ブルガリア)、入賞のニコライ・ホジャイノフ(ロシア)、エレヌ・ティスマン(フランス)も、ヤマハ CFX で個性あふれる演奏を繰り広げ、弾き手によってさまざまに表情を変える楽器の魅力と可能性に注目が集まった。

<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/smt/special/003/history.html>

ショパンの作品は、出版されたものを基に並べると次のとおり。

出版されたもの 生前	作品 1 ~ 作品 64
没後 (遺作)	作品 65 ~ 作品 74
出版されていないもの (遺作)	約 40 曲

なお、現在はほとんどの楽譜は^{あがな}贖える。作品番号が付いているものはショパンが契約していた仏、独、英の三つの出版社によるものであろう。

遺作の中にも、^{とてつ}途轍もないほどの名作が横たわっている。かの“レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ”とか、ワルツ第 19 番イ短調などは、『ショパン・ダイヤ』と言えよう。

作品の種別は次のとおり多岐に亘る。

① ピアノ協奏曲

20 歳のときの作品である

ピアノ協奏曲第 1 番 ホ短調 作品 11

<https://www.youtube.com/watch?v=VnSU5WL8TWQ>

が超人気で、ショパン自身も愛した。ショパン・コンクールのファイナルで定番の課題曲である。第 2 番の作曲は第 1 番より前なのだが、出版が遅れたため逆転してしまった。

② ピアノと管弦楽のための作品

17 歳のときの

ラ・チ・ダレム・ラ・マーノ変奏曲 : 作品 2

は、彼が正に駆け出しの時の名曲である。最初のウィーン訪問で喝采を浴びた。また、18歳のときの「ポーランド民謡による幻想曲イ長調:作品13」も捨てがたい。若い天才が煌めいている。なお、忘れ難いポロネーズに^{たお}やかなアンダンテを付けた次の佳曲は、いくら聴いても飽きられない。

アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 作品22 (24歳)

③ ピアノ・ソナタ

3曲あるが、葬送行進曲付きの

ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調: 作品35 (29歳)

が有名である。「彼の乱暴な4人の息子たちを、ただ一緒にくくりつけて押し込めた。・・・」というシューマンの評論でも知られている。

④ バラード

4曲あるが、25歳の脂が乗りきったときの

バラード第1番 ト短調: 作品23

が白眉である。既に述べたが、深遠さでこれを凌ぐショパンの曲は見当たらない。

⑤ スケルツォ

バラードと対になり、4曲ある。

スケルツォ第2番 変ロ短調: 作品31 (27歳)

が際立つ。なんとといっても中間部のトリオは、絶品であろう。

⑥ 即興曲

なんとといっても

幻想即興曲 嬰ハ短調: 作品66 (遺作: 25歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=iD4gCH9Azms>

は跳ばせない。女子フィギュア・スケートでは、毎度、誰かがこの曲で滑ってきた。華麗極まりない。スケートが下手くそでも引き立つのだから、始末に終えない。これほどの名曲をどうして出版しなかったのか、迷宮の謎とも言われているが、その方が幻想的でもある。

⑦ ノクターン=夜想曲

なぜか、遺作となった17歳の時の第19番ホ短調と、20歳で書いた第20番嬰ハ短調は、衝撃的であろう。それら以外にも

ノクターン第15番 嬰ハ短調 (33歳)

が輝いている。

すべてが夜想曲として穏やかに^{なご}和やかにBGMとしても聴ける。

ノクターンとは、一種のセレナードで、夜空を見上げながら窓辺で唄うラブ・ソングと思えばよい。ノクターンの創始者は、アイルランドの作曲家兼ピアニストのジョン・フィールド(1782-1837)である。曲の構成は、左手の伴奏にのって右手が美しい旋律を歌う。ショパ

ンがフィールドのノクターンに触発され、作曲し始めたと聞く。

⑧ 練習曲=エチュード

作品10(21歳)と作品25(27歳)の二つあり、それぞれ12曲の構成である。前者がフランツ・リストへ、後者がリストの愛人: マリー・ダグー伯爵夫人に献呈された。いずれも、クラシック史上、双頭の金字塔にもなる。バッハの平均律クラヴィア曲集に並ぶものと言える。単なる教則本にとどまることなく、芸術性ゆたかな作品である。演奏家の解釈も多彩で、演奏技術もかなり高いというから、コンテストにおいては頻繁に選択される。

「別れの曲」、「エオリアン・ハープ」、「革命」、「木枯らし」、「オーシャン」などがあるが、個別よりも、一気に全体を聴くべきものである。でも、27歳の時の

練習曲作品25 第1曲変イ長調「エオリアン・ハープ」

練習曲作品25 第12曲ハ短調「オーシャン」

が何とも言えないほど深い情感がこもったアルペジオが心に響く。これらの標題は、売込みをかけたい出版社が勝手に付けたもので、ショパンは嫌ったという。全体に名前が付けられたけれども、曲調にマッチしたものだけが、現在は生き続けている。このことは他の曲でも同様である。

⑨ 前奏曲

24曲で構成される作品28(29歳)の一つが光っている。バッハの平均律クラヴィア曲集「前奏曲とフーガ」: 全24曲を研究した成果が曲名にも反映されている。すなわち全ての24調に対応している。フーガはテンポ一定という特徴があるので、ショパンの好きなテンポ・ルバート(柔軟にテンポを変えること)にそぐわないのかどうか知れないが、省かれている。ジョルジュ・サンドとマジョルカ島(マヨルカ島)に滞在したときに完成された。

前奏曲 第15曲変二長調の「雨だれ」(29歳)

は、まさにシューベルト的抒情に溢れており、超人気だから、単独で演奏されることが多い。

⑩ ポロネーズ

なんと、7歳から作り始めた。16曲ほど書いてきたが、彼がポロネーズにいかに染まってきたか、解るような気がする。故郷の宮廷や一般市民の間で、しょっちゅう踊られていた独特のリズム感が、ショパンの潜在的な音楽的感觉として消えなかったのであろう。それが、芸術性あふれた傑作として結実したのが、次の英雄ポロネーズである。

ポロネーズ第6番 変イ長調 作品53「英雄」(33歳)

また、15歳のときの作品は、初々しく輝くポロネーズは聴きのがせない。

ポロネーズ第8番 二短調 作品71-1 遺作(15歳)

⑪ マズルカ

マズルカはポーランドの民族舞踊に伴う3拍子の曲である。実際は、マズル、クラヴィアク、

オベレクという三つのダンスに分類される。それらを総称してマズルカと呼んだものであろう。ポーランド国家もマズルで出来ているという。

ショパンのマズルカは、三つの舞曲が混合されており、見事な総合マズルカに仕上げられているらしい。いまでは定着してしまっているから、彼の天才がなせる業ともいえる。

ほぼ60曲もあるマズルカでは、次に掲げるものが逸品と言えよう。

マズルカ第2番 嬰ハ短調 作品6の2 (22歳)

マズルカ第21番 嬰ハ短調 作品30の4 (27歳)

マズルカ第23番 二長調 作品33の2 (28歳)

マズルカ第41番 嬰ハ短調 作品63の3 (36歳)

⑫ ワルツ

ショパンは、ウィーンにおけるヨハン・シュトラウスなどのワルツ・ブームに嫌気がさした。

「僕のピアノでは、マズル（マズルカの原種）しか聞こえない。」と言ったそうだ。なのになぜ、20曲も作ったのだろうか。シューマンが「ショパンは、半数以上が伯爵夫人でなければ、ワルツを弾こうとしないだろう。」と言ったとおり、彼はサロンにて、優雅な旋律を載せたワルツは最適のピアノ曲だったにちがいない。

そのようなワルツの中では、次の名曲たちは忘れられない。

ワルツ第6番 変二長調 作品64の1 (27歳) 「子犬のワルツ」

ワルツ第7番 嬰ハ短調 作品64の2 (27歳)

ワルツ第19番 イ短調 遺作 (37歳)

⑬ ロンド

ロンドとは、もともと多くの踊り手が丸い輪をつくって踊ることをいう。

ソナタ、交響曲の終楽章などに用いられる作曲手法でロンド形式という。ロンドから発展したもので、繰り返される主題：Aと、その間ごとに挿入されるエピソード（B、C）からなる。これがまとまってA B A C A B Aの構造となり、やがてソナタ形式に発展した。

ショパンは4曲残している。余り得意としていなかったが、次の曲は一般に好まれている。

ロンド 変ホ長調 作品16 (23歳)

⑭ 変奏曲

変奏曲は5曲書いてきた。あまり多くない。どうも得意とする分野ではないようである。その中で、初々しい15歳の時に創ったものが聴いて心地よい。

ドイツ民謡：スイスの少年による変奏曲 ホ長調：遺作 (15歳)

⑮ その他のピアノ曲

次の幻想曲が有名である。中田喜直作曲による1952年の日本の歌曲「雪の降る街を」にそっくりだが、中田喜直が流用したのである。

幻想曲 ヘ短調 作品49 (31歳)

⑩ 室内楽

これも少ないが、次のチェロ・ソナタは聴きごたえ十分である。ショパンの友人であるオーギュスト・フランコムのために作って献呈した。

チェロ・ソナタ ト短調 作品65 (36歳)

⑪ 歌曲

ショパンの死後、友人フォンタナにより個々の歌曲がまとめられたものが残されている。

17のポーランド歌曲 作品74 遺作 (17歳~37歳)

ジョルジュ・サンド

形が男っぽい女傑である。決して美人とは言えないが、いや、それを隠してズボンを^は佩いて葉巻を吸うスタイルは、社会にすねた熟女とでも言えようか。彼女の肖像画を見る限り、押し出しが強すぎる^{めんてい}面体には、私もゾッとする。売れっ子の女流作家だった。ペン・ネームのジョルジュは、英語読みでジョージだから男性名を名乗って、文句あるか？ と開き直っているのが、かつてのガングロ少女のようにかえって^{おか}可笑しい。ドラクロアが描いたショパンとデュエットの肖像画をみて、ようやく美形の女らしさが香るようになった。こんな連戦練磨の女傑に抱擁されたショパン、誰しも同情は禁じ得ない。



ジョルジュ・サンドの肖像
オーギュスト・シャルパンティエの油彩画

もともとは、ショパンが27歳の頃、リストと、その愛人であり、夫とは離婚したマリー・ダグー伯爵夫人に紹介されたのだが、その異様な9歳年上の熟女に圧倒され、^{きむずか}繊細な麗人を好む気難しいショパンを嫌な気分^{うきな}にさせて、最初は余り打ち解けられなかったという。ところが、数々の^{うきな}浮名を流した恋愛の達人：ジョルジュ36歳は、鍵盤上の魔人のような貴公子に惚れ込んでしまった。夜会ごとに女王蜂の攻撃が始まった。そして、ポーランド映画「ショパン：愛と悲しみの旋律」（2002年）で観られるように、
「貴方は熱愛されている」
という火がつきそうなメモをジョルジュに渡されて、ついに召し捕られる。

なお、この映画では我が国が誇るべきピアニスト：横山幸雄（1971年～）も背景ピアノ曲を弾いている。彼は、1990年のショパン・コンクールにて19歳で参加して見事に第3位を勝ち取った。

ショパンの方は、内心、マリア・ヴォジンスカとの失恋が煮え切らずに尾を引いていたから、余計に、何度も迫られているうちに、そんな強い女性に^ひ魅かれてしまった。マリアとの破局は、作家ジョルジュのことだから内々に調べていたようだ。男心の^{かさぶた}瘡蓋を剥ぐ^は絶妙の恋技ではないかと勘ぐるのは、私だけではないだろう。

結局は、ショパンが敬仰してきたヴォイチェフ・グジマワ公というポーランド亡命者団体の相談役に、彼は一身上の悩みを打ち明けた手紙で御意見を伺った。少しおいて、ジョルジュからも長文の手紙がグジマワ公に出された。彼女はどのようにしてショパンの心の拠り所を知って、間を置かずに^{こうち}信書をグジマワ公に出したのか。その時間的推移には^{うさんくさ}狡知さがにおい、どうも胡散臭

い。この成り行きは闇の中に消えているけれども。

結果として、二人は結ばれた。映画では、次の名作がメインテーマとして流れている。

ワルツ第19番イ短調（遺作）：38歳

<https://www.youtube.com/watch?v=CcIx3ElOs80>

他に、レント・コン・グラン・エスプレッシーネも姿を現すが、あてつけがましい。

このワルツは、二人が別れてからの作曲だから、適切ではないのだが、それでも微かな諦観に相俟って、はかない慕情の匂いに包まれているから、的は大きく外れていない。この曲は、ある意味で美の極致とも言える。あの“レント・コン・グラン・エスプレッシーネ”を捧げたマリアへの想いに対抗できるものとして。私も、恥ずかしながら、この年になって初めて聴いて、瞬間的に耳朶に貼り付いてしまった。映画での使用も、そういった効果を狙ったのかもしれない。実は、ジョルジュに捧げた曲は、私の知る限り皆無だから、ジョルジュに対するショパンの魂の状態を探る手立てが見つからなかった。その手掛りによりやく邂逅したので、私は、ショパンとジョルジュとの9年間について書ける自信がついてきた。

【ピフォエル：デカ鼻人】参考：バルバラ・スモンレスカ＝ジェルンスカ著「ショパンの生涯」

1836年夏に、スイスの山岳ホテルに泊まった風変わりな一行は、チェックイン・シートに次のように記入した。

宿泊者名	ピフォエル
住所	自然
出発地	神
目的地	天
出生地	ヨーロッパ
職業	放浪
旅券等の有効期限	永遠
旅券等の発行者	世論

この旅人たちは、ジョルジュ・サンド、その息子のモーリス（15歳）、娘のソランジュ（10歳）と乳母、そしてリストと愛人のマリー・ダグー伯爵夫人であった。

ジョルジュの本名は、オロール・デュバンであり、デュバン男爵との不幸な結婚を解消し、パリに住んでいた。きわどい恋愛小説で売れっ子になった女流作家でありながら、同時に、数々の愛憎痴話で勇名を馳せていた。また、男爵との離婚裁判で争い、子供二人の親権と、先祖からのノアンの所領を確保した。

ジョルジュと息子モーリスは、鼻が大きい。それをもじって“ピフォエル”と自慢していたらしい。

1836年の秋に、ジョルジュはダグー夫人とともに、「パリ文芸サロン」をフランス館：ホテル・ド・フランスで開いた。リストやダグー夫人らに引き寄せられた著名な文化人たちは、以下のとおり。

マイヤベーヤ（音楽家：歌劇作曲家）

ベルリオーズ（音楽家：作曲家。「幻想交響曲」を1830年に発表。）

フェルディナンド・ヒラー（音楽家：ピアニスト）

ヌーリ（声楽家）

ハインリッヒ・ハイネ（ドイツの詩人）

ド・ラムネー神父（思想家）

アダム・ミツケヴィッチ（ポーランドの文学者。ショパンのバラードの背景。）

ヴォイチェフ・グジマワ公（ポーランド人の相談役）

フレデリック・ショパン など

リストに手引きされたショパン（26歳）は、ジョルジュに引き合わされたが、興味が湧くどころか、全く気に入らなかった。宴会後、ヒラーに「本当に女なのか？ 僕は疑いたいね。」と吐いた。また、「彼女には何か不快感がする。」と両親への手紙に書いていた。ショパンの頭の中は、まだマリア・ヴォジンスカでいっぱいだった。

所領のノアンの屋敷にもどったジョルジュは、ショパンに何度も招待状を送ったが、一度も応じようとはしなかった。しびれを切らして、マリー・ダグー夫人に、「ショパンに言って、私は彼を偶像のように崇拝している」と頼んだ。ショパンは、マリアとの再会に望みをつないでいる最中であり、かつ、レッスン、サロン、作曲と忙しかったから、無視された。

ジョルジュは、ようやく1838年春に、スペイン領事の妻であるシャルロッテ・マルリアーニ伯爵夫人が主催のサロンにて会うことができた。マリアとの決別で傷心のショパンであったが、サロン演奏では彼の天分を遺憾なく発揮して会場を盛り上げた。ジョルジュは恋愛の達人であるから、なるべく女性らしく^{たお}なやかに振る舞い、「貴方は熱愛されている」という麻薬のラブ・メッセージを手渡した。彼女は決断した。何が何でもモノにすると。そして、あの男装の冷たい態度を一変して、優しく撫でるようにショパンに擦り寄った。マリアで空いた^{うろ}洞にジョルジュは、見事に座り込んでしまった。ジョルジュは、リストやマリー・ダグー夫人などから、ヒアリングしてショパンの心の状態を探っていたのだろう。作家だから、下調べはお手の物である。

そして、9歳年上の女らしく、母や姉のように気づかいが細やかに^{へんげ}変化したジョルジュと、ショパンは恋に落ちてしまった。彼女は、スペインの温暖気候のマジョルカ島への療養旅行に連れ出すことに成功した。1838年11月であり、寒いパリからするとショパンの健康には歓迎すべきものと思われた。ところが、地中海では、雨期になるので、マジョルカでは湿気が

上がり、ショパンの体は耐えられない。咳込んで風邪をひき、島の藪医者に診てもらおうほどになってしまった。ショパンはパリに戻りたいとぐずり出した。

でも、この滞在では、遠方のパリから高い運送費を払って、贅沢にもプレイエルのピアノを手配して運び込み、ショパンの作曲熱を発散できたが、ピアノ音に神経質になったジョルジュの息子のモーリス（16歳）がヒステリーを起こした。これが、ジョルジュの家族との喧騒^{けんそう}に発展してしまった。彼女は必死にショパンとモーリスの仲を懐柔したが治まらなかった。

そのような中でも、前奏曲集という傑作が完成した。

前奏曲集 作品28 第15番 変二長調「雨だれ」（29歳）

<https://www.youtube.com/watch?v=B7UgLUYW55U>


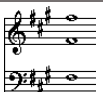
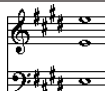
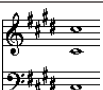
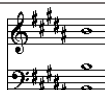
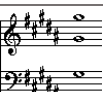

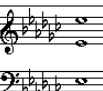
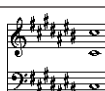







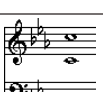
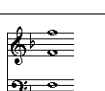
この有名な曲は、マジョルカ島滞在の折、降り続く雨の中での想念が曲になったものと語られてきている。出版社が付けた題名ではあるが、意外に合っている。それよりも、抒情的であることことの方が、風景がどこに変わっても印象は転移できるという名作であろう。「雨だれ」という題名は気にせず、自分なりにいろいろな環境と精神状態において聴くことができる。

【前奏曲集 作品28】

マジョルカ島でのヴァカンス中に作られたショパンの前奏曲集は、バッハの平均律クラヴィア曲集「前奏曲とフーガ」全24曲を研究した成果が結実した傑作である。バッハの構成は、1オクターブ：ハニホヘトイロという音階と黒鍵五つを合わせた12音階に基づく、長短24の全ての調性それぞれに基づいている。

バッハとショパンの対照

平均律クラヴィア曲集第I巻 前奏曲とフーガ		ショパン 前奏曲集 Op.28		調号 https://ja.wikibooks.org/wiki/調_(音楽)#変二長調
第1番	ハ長調	第1番	ハ長調	
第20番	イ短調	第2番	イ短調	
第15番	ト長調	第3番	ト長調	
第10番	ホ短調	第4番	ホ短調	
第5番	ニ長調	第5番	ニ長調	
第24番	ロ短調	第6番	ロ短調	

第19番	イ長調	第7番	イ長調 (太田胃散)	
第14番	嬰へ短調	第8番	嬰へ短調	
第9番	木長調	第9番	木長調	
第4番	嬰ハ短調	第10番	嬰ハ短調	
第23番	口長調	第11番	口長調	
第18番	嬰ト短調	第12番	嬰ト短調	
第13番	嬰へ長調	第13番	嬰へ長調	
第8番	変木短調	第14番	変木短調	
第3番	嬰ハ長調			
		第15番	変ニ長調 「雨だれ」	
第22番	変口短調	第16番	変口短調	
第17番	変イ長調	第17番	変イ長調 (無言歌)	
第12番	へ短調	第18番	へ短調	
第7番	変木長調	第19番	変木長調	
第2番	ハ短調	第20番	ハ短調	
第21番	変口長調	第21番	変口長調	
第16番	ト短調	第22番	ト短調	
第11番	へ長調	第23番	へ長調	

第6番	二短調	第24番	二短調「嵐」	
-----	-----	------	--------	---

ショパンの前奏曲の調性は、

ハ長調 → イ短調 → ト長調 → ホ短調 → . . .

と、長調と平行調が5度圏^註を上がっていき、全ての調を一回りする。

これは、彼が敬仰したバッハの平均律クラヴィア曲集の

ハ長調 → ハ短調 → 嬰ハ長調 → 嬰ハ短調 → . . .

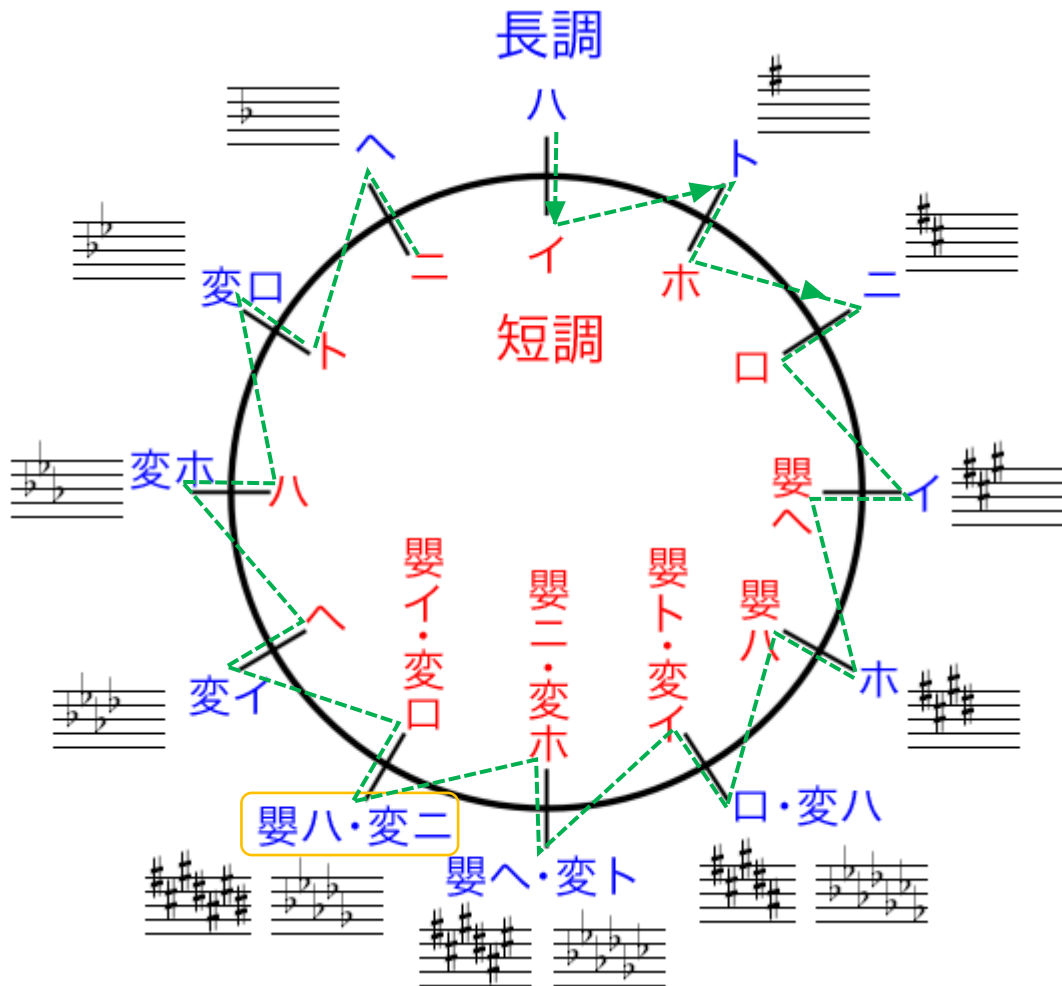
と、同主調が半音階で上がっていく方法とは違い、より曲と曲との関連性に重きを置いている。

下田幸二著「ショパン全曲解説」より

[註]

五度圏とは、次図のように、5度の関係にある調を隣同士に置いて丸く（圏）書ける。

[https://ja.wikibooks.org/wiki/調_\(音楽\)#変ニ長調](https://ja.wikibooks.org/wiki/調_(音楽)#変ニ長調)



このように、素人には理解できない専門的な研究を深めたショパン。しかも、憂鬱なマジョルカ島の梅雨（冬季）の中で、咳をしながらよくぞ書き上げたものだ。ピアノ音楽に親しむどころか、それ以前にピアノ音にいつまでも慣れようとしないうるジョルジュの愚息モーリスの苦情

を浴びながら、ひたすらに学問の粋を結集させた。理論にこだわりながらも、芸術性を極めた。これこそ、正に**ピアノの華**と見えよう。

【喧騒と別れ】

マジョルカ島でのヴァカンスから戻る時に、連絡船では豚数十頭と相乗りになり、その猛烈な臭いに加えてショパンは船酔いに悩まされ、咳込んで吐血してしまった。なんとか、ジョルジュの男勝りの努力で、後半は都合よく軍船に乗り替えて、軍医の世話になりながら、無事、マルセーユに帰港した。

1839年以降、ショパンの生活は、夏はジョルジュのノアンの館で、冬はパリで、毎年、交互に移動することになった。

ノアンの館は、パリから270kmほど南下したフランス中部、ベリー地方のIndre（アンドル）県に位置する。ジョルジュが少女期を過ごした祖父の館である。ショパンは1839年以降、サンドと別れる1846年までの7回の夏をこのノアンの館で過ごした。



http://www.piano.or.jp/report/04ess/prs_cpn/2008/12/12_7452.html

地上階には8つの部屋がありますが、ガイドツアーはキッチンから始まります。キッチンを見てみると、ジョルジュ・サンドは当時の最新設備に関心を寄せていたことが分かります。たとえば、扉の下には各部屋につなげられた鈴の装置があり、客人はこれを使って使用人を呼ぶことができました。さらに、蒸気を煙突まで排出させるシステムを備えたオープンまでありました。

<http://www.mmm-ginza.org/museum/serialize/mont-back/0810/montalembert.html>

さすがに、神経質のショパンにとっても、ノアンの館には満足した。しかしながら、パリでの作曲生活とサロン演奏や弟子へのレッスンは人気も高騰して、捨てがたいことから、ノアンの交代生活を営むことにしたのである。



<http://www.mmm-ginza.org/museum/serialize/mont-back/0810/montalembert.html>

ジョルジュは、ショパンの世話女房として汗をかいて、稀代のピアニストの病気にも気を使い、せつせと尽くした。

そんな静謐で快適な生活は数年間つづいたが、

やがて、1846年頃になるとモーリスとの諍（いさか）いが次第におおきくなり、一方、19歳にもなった娘ソランジュがショパンを味方に付けて、母との喧騒に発展させた。

24歳の大人になってもモーリスは、マザー・コンプレックスが激しく、母とショパンの男女の仲を毛嫌いした。結果として、ノアンでの家族は二手に分かれて冷戦する日々が益々増え、ソランジュは勝手に貧乏彫刻家クレサンジェと結婚を決めて、優しいショパンに応援を求めた。当然ながら、ジョルジュは、愛人ショパンを裏切り者と決めてかかった。また、モーリスは、借金まみれのクレサンジェがノアンに乗り込んで来て無心してきたから、乱闘騒ぎを起こして、ショパンを大いに落胆させた。

こうなると、二人は別れるしかない。1847年、ジョルジュからの決別の手紙で、ショパンもついに諦めた。本来的に、二人の子供を無難に育てることだけでも母親は疲れ切ってしまう。ショパン自身は、稼ぎは十二分にあつて、彼の巨大な名誉のおこぼれにも予想を遥かに超えてあづかった。が、彼は半病人であり、絶え間ない介抱が必要だった。さらに、大人にさしかかった二人の子供の身勝手な行動に振り回されれば、いくら男勝りの神経でも摩耗しきったことは、容易に想像できる。

ただ、9歳も年上の姉さん女房なら、下調べが専門の小説作家なら、それは一緒になる前から予想できたことであろう。不測の事態にすることは出来ないし、ショパンのせいにするなどのもつてのほかである。ショパンは、結果として、「切って捨てられた」のである。それは、ジョルジュの過去の愛人関係の一方的な清算による事件をみれば明瞭である。

*****参考：バルバラ・スモンレスカ＝ジェリンスカ著「ショパンの生涯」より*****

ショパンの直前まで、ジョルジュの愛人であった若いマルフィーユは、息子モーリスの養育係であった。1838年、ジョルジュは別れ話をするでもなく、モーリスとマルフィーユにノルマンディ旅行をアレンジして送り出し、ショパンとのロマンスに耽った。1ヶ月して、彼らが戻ってくると、マルフィーユは不穏に気付いて、周りの人々から事の真相を初めて知り、狂ったように屈辱感と嫉妬に燃えた。そして、待ち伏せしてジョルジュに襲いかかったが、ジョルジュは素早く通りかかった馬車に乗り込んで難を逃れた。マルフィーユはショパンとの決闘も考えたが、幸いにもこれには至らなかった。マジョルカ島への旅は、このような痴話喧嘩を冷ますためにも計画されたという。

仮に、ショパンと一緒にならなかったら、ジョルジュはこれほど有名になったろうか、という疑問は永遠に消えない。彼女の生涯はショパンといたからという一言に尽きる。ショパンの前にも後にも彼女の人生は、良かれ悪しかれ、誰も気につけない。というより、魅力が、少なくとも私には湧かない。やはり「打算の女」だったと私は結論している。

でも、ジョルジュの果たした役割は、このクラシック巡礼においても書いているように、ショパンを語る際に、必ず触れざるを得ない。そういった意味で、彼女の功罪は永遠である。

言わずもがなになるが、この母子三人の振舞いを書籍で見ると、三人とも、

音楽芸術に不感症であった

ことがわかる。ショパンもそれが分かってくればくるほど、呆れてモノも言えなくなったろうし、そこはかとない侘^{わび}しさを感じざるを得なかったに違いない。

【ドラクロワ（1798 - 1863）】

凄まじいショパン・フリークが、歴史を刻んだ。

<<https://guchini.exblog.jp/16610192/>>

フランス、ロマン派の巨匠ドラクロワが、1838年に描いた一枚の絵「ジョルジュ・サンドの前でピアノを弾くフレデリック・ショパン」・・・



絵はピアノを弾いているショパンの背後で恋人のジョルジュ・サンドがその音楽に聴き入っている構図で、二重肖像画として、縦100x横150cmのキャンバスに描かれ、ドラクロワの死後、今は美術館になっている、サン・ジェルマン・デ・プレ界隈にある、フルスタンベール広場のアトリエ兼住居に置かれたままの状態で見つめられた・・・その後、1863～73年頃に、**絵は別々に切り分けられ、ショパンの部分はルーヴル美術館所蔵に・・・**

ジョルジュ・サンドの部分は、競売でデンマークの実業家に買い取られ、今はコペンハーゲンから30分ほどの距離にあるオールドルップゴー美術館に展示されている・・・

そして、切り分けられたショパンのキャンバスサイズは縦45.5×横37cm、ジョルジュ・サンドのは少し大きく縦79×横57cmで、ルーヴル美術館に残されていたドラクロワのデッサン(スケッチ)からも、間違いなく一枚の作品であったことも判明した・・・

<<https://guchini.exblog.jp/16610192/>>

「民衆を率いる自由の女神」1830 ルーヴル美術館

1830年のフランス7月革命を題材としたドラクロワの代表的な絵画



<http://www.art-library.com/delacroix/index.html>

ウジェーヌ・ドラクロワは、1838年（ショパン28歳）、一緒になったばかりの二人の肖像画を描いた。ショパンには、かねてより憧憬していたという。一流画家が天才音楽家に惚れ込んだのである。これほど、凄まじいショパン・フリークは見当たらない。ドラクロワは、ショパンとその音楽に心酔して描いたにちがいない。ジョルジュは付け足しである。だから、後々に、どちらかの熱狂的ファンの誰かに、あるいはドラクロワ本人に「引き裂かれた」のではないかと疑いたくなる。ただし、ショパンだけは、世界一の年間入場者数860万／2015を誇るパリのルーヴル美術館が所蔵し、ジョルジュは放置され、やがてデンマークの目立たない美術館に売られたことを考えると、歴史とは如何に冷静沈着であるかを物語っている。



<http://www.art-library.com/delacroix/index.html>

ジョルジュは、ショパンとの関係に影がさし始めてきた1845年に小説「ルクレチア・フ

ロリアーニ」を書き始めた。主人公はカロールという神経質で憂鬱な公爵と、劇作家のルクレチアの二人であった。どうも、ショパンとジョルジュをそのままストーリーに持ち込んだ感は否定できないらしい。これを、ドラクロアは、ノアンで二人の朗読で聞かされたときに、「その場を逃げ出したくなった」と友人に語った。

望郷

彼は悩むたびに、故郷に想いを馳せた。それが、39歳で迎える最後の絶筆、マズルカ第51番へ短調（作品68-4遺作）まで、絶え間なく続く。私は、マズルカ全59曲をアルトゥール・ルービンシュタインの名演で20歳から聴いてきたが、いまだに覚えられないほどの望郷一色に、時にはアングリしてきた。しかしながら、こうして彼の生涯を書物でたどってくると、もっと理解したくなるから不思議でもある。

問題は、フランス人のジョルジュには絶対に理解できない言葉の壁である。ポーランド出身の人々が、パリでどうして寄り合うのか、利用はしても解ろうとしなかった。人が真に愛されると感じるのは、その人のどうしようもない同胞^{ほらから}の想いに共鳴してくれたときである。ジョルジュは終に判らなかった。彼は、幼少からの言葉の慣れから離脱できなかったのだ。だから、同じポーランド人のマリアにはその障壁が無く、親しみはごく自然であった。

私もロンドン駐在3年の経験があり、ときたま出張で東京の土を踏んで、友人たちとの話は気が狂うほど弾んだ憶えが懐かしい。逆に、彼らが出張でロンドンに来た時にも今では考えられないほど歓待した。そんな経験に照らすと、ショパンは永遠に亡命者だったから、家族に来てもらうしかなかった。しかも、数年に一度程度である。

そういった潜在的なストレスが「マズルカ」に反映した。これをジョルジュが解っていたら、マズルカを聴いてあげたら、「私はこれが好きよ！」と言ってあげたら、彼は絶品のバラードを書いて彼女に捧げたであろうに、と想像することは、私だけの感傷になるだろうか。

そんなマズルカの中で私が百回以上も聴いてきたものが、次の曲である。

マズルカ第41番嬰ハ短調 作品63-3 (36歳)

https://www.youtube.com/watch?v=5Sh5hry_qDg

すべての望郷の哀感^{かわ}が乾いて結実している逸品であり、誰しも静かに瞑目^{めいもく}して聴くしかない。

白鳥の歌

白鳥は死に際しか鳴かないという。しかもその声は聴いたこともないような美しい鳴き声らしい。作曲家にはそれを創る力がある。彼も、39歳で死期が迫りくるのを悟った時には、手も震えて曲を書けなかったらしいが、葬儀の際にモーツアルトのレクイエムと、彼の次の二つの作品を演奏して欲しいと遺言をのこした。

前奏曲第4番ホ短調 作品28-4 (28歳)

前奏曲第6番ロ短調 作品28-6 (29歳)

特に第4番を聴いたら何も言えなくなる。

私は思い出した。このクラシック巡礼を手ほどいてくれた五味康祐の最後も、モーツアルトのレクイエムとバッハのマタイ受難曲を流して通夜をしてくれと遺言を残した。それが実現されたかどうか知らないが、10年ほど前に、彼の^{はいおく}廃屋となった屋敷から、彼の愛したオーディオ・システムが運び出された。彼を偲ぶ人々がかけあって練馬区役所が動いた。そして、20年以上も^{ほこり}埃をかぶってきた全機器を入念にオーバーホールして、LPレコードも洗浄されて^{よみがえ}蘇った。そこで、五味康祐を偲ぶレコード試聴会が毎月開かれるようになった。たぶん、そこで遺言は成されたことと思う。

ジョルジュと別れた彼は、弟子であったジェーン・スターリング女史(9歳年長)の誘いに応じて38歳でますます弱まる病身を励ましながら、イギリスに渡った。なんとか演奏会やサロンの祝演を務めたが、鼻高々のジェーンは、郷里のスコットランドの親戚中に彼を引き回した。これには^{こた}堪えたい。当時は、汽車が発達したばかりで、エジンバラまでの旅はそれほどきつくはなかったが、なにせ、スコットランドの田舎を馬車で巡ったから、かなり心身を痛めた。ジェーンはスコットランド随一の金持ちの令嬢であったので、^{ちき}知己も多かった。それも災いした。さすがに、ホテルは超一流の部屋が提供され、ショパンの好みに沿ってきめ細かに配慮されたのだが、動くこと自体が体に響いた。

半年近くの旅を終えて、ようやくパリに帰り着いた時には、もう虫の息に近い状態だと言われてきている。そして、咯血して寝込んでしまった。ところが財布が尽きている。彼は典型的な芸術家だったから、あるだけ使い果たすように散財する始末で、さらに蓄財観念が皆無だった。演奏会を開いたり、曲を書いたり弟子のレッスンをしたりすることが出来なくなったから生活費や医療費に困った。実家から支援をねだった。そんな時に、ジェーンから援助金として2万5千フラン(約5千万円)が届けられた。ショパンは、申し訳なさそうに、そのうちの1万5千フランを受け取ったという。

そして、臨終の間際に、デルフィナ・ポトツカ夫人がベルリーニのアリアなど3曲をショパンの病床脇で、ピアノを弾きながら、すすり泣きながら歌った。ショパンはそれを聴いて落涙したという。

1849年10月17日、姉ルドヴィカや大勢の友人たちに看取られて静かに39歳の生涯を閉じた。ついに、ジョルジュは来なかった。ショパンの相談役だったグジマワ公は友人への手紙に、「ジョルジュ・サンドと出会う運の悪さがなかったら、もっと長生きできただろうに」と嘆いたそうだ。一緒になる前の二人から前後して、それぞれ手紙で相談された人だから、この言は重い。



https://blogs.yahoo.co.jp/karajan_abbado/13732523.html

描かれている人物は、ショパンの手を握っているのが姉のルドヴィカ、顔を伏せて泣き崩れているのはジョルジュの娘のソランジュとされている。ピアノを弾きながらに歌っている夫人はデルフィナ・ポトツカ伯爵夫人。

こうして、他界してしまった彼奴が残した遺言のうち、次の

前奏曲第4番ホ短調 作品28-4 (28歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=E6RNU6eLAgI>

については、語ろうとする度に彼奴の寂寥感が沁み出てくる。淋しい音楽は数少なく、普段はほとんど聴くことは無いが、この前奏曲は、宇宙の果てしない空間に浮いて彷徨うような気分させられ、頭の中が空虚になる。

彼奴にはピアノがあった。それが彼奴の生命であり、魂を紡ぎ出す五体の一部だったのである。しかも生まれ出る調べは、ほとんどが哀感にあこがれて生気がふくらんでくる。だから、ピアノがないと即座に病気になったのだ。

蓋し、究極の音楽の染料の一つは、彼奴のマリン・ブルーの哀愁なのである。

しかしながら、そういったあの世の時空から、私たちを現生に戻してくれる覚醒剤も用意しているから、やはり彼奴はピアノの神性を自由に操れる力を備えていた。

前奏曲第7番ハ長調 作品28-7

<https://www.youtube.com/watch?v=yLU4wgtpjGs>

この名曲は、私たち日本人にとって即座に太田胃散を思い出すが、彼奴はこれをもって私たちに、「私は安らいでいます、いい曲です」というメッセージを伝えている。

白鳥の歌には、二つあったのだ。

エピローグ

彼は生まれてきて、ピアノの華^{はな}になった。彼がこの世に現れていなければ、これほどピアノの世界が広がっただろうか。なによりも華麗である。美しさは無限にあるが、それがほのぼのと薫^{かほ}るものは少ない。人は美醜^{びしゅう}にこだわりながら、さらなる雅^{みやび}な華麗さを求める。

何故か、これに敏感なのが女性である。男は心意気に終始する。奇妙な取り合わせであるが、二人が結ばれないと人は生まれない。

美は男が創り、女が審美する。そんな世界をショパンのサロン^{かな}が叶えた。

ショパンは、子孫も残さず、財すら築かない、歴史的な偉業もない。なのにどうして、偉人として祀^{まつ}られてきているのだろうか。答えは簡単である。彼は、眩^{まぶ}しいほどの名曲たちを産み残したのだ。これを知の遺産という。ただし、それを堪能できるだけの美を見極める審美眼がないと、彼の偉大さはとことん感知できない。

審美眼には、感動^{いしずえ}に礎がある。感激は単なる享楽でしかない。年取って暇だらけになって、いくら海外旅行や、名所旧跡を訪れて伝統ある旅館で土地の料理をグルメしても、それは感激でしかない。帰ってくれば疲れだけが残る。アルバムに記念写真^とを綴^とじるだけが宿題となる。

感動とは、感じて動くと書く。美を堪能したら、何かを創り、何かに貢献して、この社会の新陳代謝に尽くさねばいけないことになる。それが人間の人間たる所以である。

宮城谷昌光の小説「子産」を読んだとき、『礼』の基本を覚えて感動した。だから、私は視聴者や読者に伝承する行動をとってきている。

中国古代の聖人である子産に拠れば、礼とは、天地人の三元で働くという。天の礼とは、経糸^{たていと}たる「宇宙の経^{けい}」を暗示することであり、地の礼とは天と人に対する「義」であり、人の礼とは天地人に対しての「人の行^{ひとこう}」であると。音曲^{おんぎょく}が、まさに、天地人という時空のなかで人の大いなる行となることは、バッハやベートーヴェンのようにショパンも身をもって示したのだ。

ただ、甘い密に群がる昆虫類に、人はどうしても嫌味を感じる。でも、虫さえも「共生」という共に生きることを是としている。花粉を運んで遠くのメシベに付けて、果実を結ばせる。野鳥はその実を食べて栄養を蓄え、種^{たね}を遠くに糞として落とし、新たな芽吹きに貢献する。でなければ、お互いに種の保存ができなくなり絶滅してしまうからだ。

リストは彼の宝^{ほうぎょく}玉を賞味して更なる宝を産み出したが、9年間も独占したジョルジュは何を残したのか。

エンディング・テーマ

アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変木長調 作品22

<https://www.youtube.com/watch?v=jPICMjqb2Jg>

<参考図書等>

No.	題名	著者	発行元
1	ショパンの生涯	バルバラ・スモレンスカ=ジェリンスカ 訳: 関口時正	音楽之友社
2	フレデリック・ショパン	フレデリック・ニークス 訳: 田部節	全音楽譜出版社
3	ショパン	小坂裕子	音楽之友社
4	ショパン	遠山一行	新潮社
5	全曲解説 ショパン	下田幸二	(株)ショパン
<p><DVD></p>			
6	ショパン「愛と哀しみの旋律」	監督: イェジ・アントチャク	(株)ショーゲート